

審査の結果の要旨

氏名 太田 峰夫

本論は20世紀初頭のハンガリーの作曲家、バルトーク・ベーラ(1881-1945)を対象とし、彼の中で、ハンガリー性を強く志向する文化ナショナリズム的な方向性と、インターナショナルな志向をもつモダニズム的な方向性とがどのように絡まり合って、その音楽活動を形作っていたかを解明した研究である。バルトークは、西洋の現代音楽の領域で最前線の作曲家として活躍する一方で、「農民音楽」に強い関心をいだき、実用化されたばかりの録音機材であるフォノグラフを手にも、ハンガリーを中心とする各地の民謡を自ら採集し、五線譜に採譜したものを出版もしている。バルトークのこの二つの活動は、従来それぞれ異なったコンテキストで別々の問題として論じられることが多く、彼の活動の中でのそれらの関係も、両者を結びつける社会的コンテキストも、十分に捉えられてこなかった。本論は、その部分に焦点をあて、斬り込んだ斬新な研究である。

全体は六章からなり、最初の二章では、同時代の民族誌研究や「民俗芸術」をめぐる状況など、ハンガリーの文化的コンテキストが論じられ、バルトークの「農民音楽」に対する関心のありようの背景にあったコンテキストが解明される。

続く二章では、バルトークの中で、作曲と民謡収集という二つの活動が結びつけられる際のキーワードとなっている「農民音楽」という概念とその周辺の状況が論じられるが、彼がこの語自体にどのような含意をこめたかだけでなく、その作曲活動の中で「農民音楽」のあり方がドイツ音楽的なものと結びつけられて展開され、普遍化されてゆくさまを、批評的言説での受容などもからめつつ、同時代の文化的背景の中で多層的に捉えている。

残る二章では、バルトークの民謡研究での用語法の変化と、ストラヴィンスキー受容という二つのトピックを取り上げ、前章までで明らかにされたバルトークの音楽観について、その通時的な変化や周囲の人々との齟齬の側面に焦点をあてて論じている。

本論は、最近急速に進展している、当時のハンガリー社会やそこでの民族観のあり方に関わる最新の研究成果を十分にふまえて、バルトークをそのような背景との関わりの中に置き直すことによって、これまでのバルトーク研究にはみることのできなかつた新しい視点を切り開くことに成功している。フォノグラフが当時の民族誌研究で担った役割、一八九六年のハンガリー建国千周年博覧会の展示として出された「民族誌村」の状況など、様々な興味深いトピックが提示されている。また、バルトークの同時代の批評、雑誌記事などを相当の広範囲にわたって丹念に調査しており、それらの様々な言説のコンテキストをふまえることによって、これまでのバルトーク像にはなかつた奥行きが得られたことも評価しなければならない。とりわけ、バルトークや同時代の人々がローカルな「農民音楽」を「普遍化」して捉えてゆく際のロジックの孕む問題が、それらの言説と背景にある同時代の民族観との関わりの中であぶり出されてくるあたりの議論は、バルトーク研究をこえて、様々な領域の文化研究にとっても、教えられるところが多いように思われる。

多様な問題が多層的に折り重なるテーマゆえ、まだ展開の余地が残る部分、さらに周到的な議論が求められる部分も多いが、それらを割り引いても十分な評価に値する野心的な労作であり、本審査委員会は、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認定するものである。